

「一人ひとりである一つ」

エペソ人への手紙 4 : 7

September.24.2023

## エペソ人への手紙 4 : 7 (パウロ)

### Preface

「しかし」という言葉から始まっております。

この前の節 4 節から 6 節まで、「からだは一つ、御霊は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つ、主はお一人、万物を創造された父なる神はただおひとりだ」と、使徒パウロは「一つ」という言葉を 7 回使用しながら、キリストにある一致について語って参りました。

ですが 7 節に入りますと、「しかし」という接続詞を用いながら、あたかもその逆のこと、一致とは違う「不一致」、「相違」について語るのかなあと一見思わせますが、そうではなく、キリストにある一致のさらなる深み、深いところについて語り始めます。

即ち、一人ひとりがあつての一致だということです。

まことの一致、キリストにある一致は、一人ひとりが生き生きと豊かに尊重されているということについて語り始めます。

7 節以降でも変わらずパウロは、「平和の絆で結ばれて、御霊による一致を熱心に保ちなさい」ということについて語ります。

ではなぜ、「しかし」という接続詞を用いて、あたかも逆のことを語るかのよ  
うな表現をしたのか？

それは、「一致」と言いますと、私たちは、とかく機械的な一致を求めてしま  
いがちだからです。

活気のない一律な枠にはめられたものを想像してしまう恐れを払拭するた  
めに、御霊による一致を熱心に保つこととは、カッチカチの生命力も弾力もない大  
きな塊の一部になることではないということを教えてくれようとしております。

### Part One

すべてのものを機械化し、機械化したことによって、効率的に同じ物を大量に  
生産し、同じ物を大量に売り出し、同じ物を大量に消費し、同じ物によって大き  
な利益を上げることが成功とか、勝利とか、上手くやったと評価する社会風土の  
中で生きて来てしまった私たちにとって、一致とは **unity** ではなく、**uniformity**  
かもしれません。

**Unity** は言葉を変えますと、「調和」と言えるでしょう。

形も違い、性質も違い、奏でる音も、動き方や働き方や水準も違うかもしれな  
いけれども、そこには決して崩れることのないハーモニー、調和、まとめ、結

束、血の通った統一があるのが **unity** です。

私たちが直ぐにでも目の当たりにすることの出来る最も端的な **unity** は、神の造られた天然世界だと思います。

創世記 1 : 3 1 を見ますと、神ご自身お造りになった天地万物をご覧になられて、「非常に良かった」と宣言しておられますが、それは「完璧だ」と、「パーフェクトな調和だ」と、「崩れることのないハーモニー、いつまでも循環可能な和合、一致だ」ということです。

神がお造りになった天然世界は、本来、一切人間の手を加える必要のない **unity** です。

むしろ人間が、あたかも自分たちが神にでもなったかのように手を加え続け、その調和を、循環を壊してしまったのが、今のこの地球環境でしょう。

「地球丸ごと一つ壊しただけでも十分な暴虐行為なのに、それにも飽き足らず、今度は月まで壊そうとしている」と仰っている元ジャーナリストの牧師先生がおられますが、「その通りだなあ」と思います。

人間が壊して破壊してしまったものの、まだこの天然世界の端々には、神の **unity** の卓越さ、素晴らしさをあらゆるところに見ることが出来ます。

例えば、計り知ることも出来ない大きな宇宙の数えることも出来ないほどのたくさんの星々が、一定の距離や秩序を保ちながら存在していることも **unity** だと思いますが、そのたくさんの星々の中の小さな小さな一惑星に過ぎない地球の中にある **unity** の内容を見ますと、面白いことに、「完全な一致だ」というのに、何一つ同じ形のものが存在しないということを発見します。

私は毎週海に行って波を見ておりますが、同じ波は一つとして存在しません。寄せては返す波だという点では同じですが、その形、その力、その割れ方において、同じ波はありません。

同じ種類で、同じようなところに植わっている小さな草花一つとっても、全く同じ形のものは存在しません。

どこかしら違います。

葉っぱの形が違ったり、花の色が同じ赤だとしても、全くもって同じ赤い色の花は存在せず、赤という色は、赤い花の数だけあるという「違い」があります。

私たち人間だってそうです。

同じ人種の、同じ民族の、同じところに住み、同じ言葉を使い、同じ物を食べたとしても、顔のパーツ一つ一つに特徴があり、体格も違い、指紋が他の誰かと一致する人は存在しません。

同じ父親、同じ母親から生まれて来ても、同じ人はいません。

もっと面白いのは、この天然世界には、直線が存在しないということです。全部どこかしら曲がっていて、全部どこかしらデコボコです。

例えば、鹿島の海に行きますと、大きな風力発電の風車が海に面して何基も立っているのですが、風力発電のあの大きな羽を作っているエンジニアが、「大量の風を受けるのにもっと効率のいい羽根を作るにはどうすればいいのだろうか」と追及したところ、トンボの羽根に行き着いたそうです。

トンボの羽根は、パッと見たところ綺麗な曲線の形の羽根4枚が織り成されて構成されているように見えますが、実のところ、その羽根の形を成している線はデコボコで、表面もデコボコで、何一つ真っすぐに綺麗な線は存在せず、無秩序に見えるような無作為な線によって形作られているというのです。

そしてもちろん、トンボ一体一体すべて、その羽根の形は微妙に違い、人間の指紋のように同じ羽根は一つも存在しません。

そんなてんでバラバラなのに、風を受ける能力においては、風力発電のツルツルの綺麗で滑らかな曲線によって構成されたあの大きな形の画一的な羽根とは比較にならないくらい小さくデコボコであるのに、小さくてもデコボコであるがために風を受ける表面積が広く、効率よく風を受けることが出来、ヒュンヒュンヒュンと、一瞬にしてとんでもない速さで飛ぶことが出来るというのです。

面白いですね。

2019年にノーベル化学賞を受賞された吉野彰さんという方が、「自然界で起こっている現象の理解は1, 2%くらいで、残り98%は手つかずの宝物です」と仰っていたことがありましたが、トンボの羽根の例は、天然世界の無数の神秘の内の一例に過ぎません。

神の造られた天然世界には、何一つ真っすぐで、平らで、滑らかな線は存在しないのに、そのすべてがぴっちり合わさり、淀みのない相互関係を保ち、循環し、すべてが無駄になるものなんか一つもなく、ごみなんか出てくることもなく、最も効率が良く、最も美しく、人間が手を加えさえしなければ、幾らでも続く永続性を持っているのが、神の造られた元々の天然世界の有り様ですね。

この世に存在するゴミと言われるもののそのすべては、天然世界を材料にして人間が作りだした物か、天然世界に人間が手を加えて形を変えてしまったものばかりです。

何で人工物が自然の中にあると目立ってしまうのか？

それは、真っすぐな直線、真っすぐな曲線、どんなことをしても自然に溶け込むことの出来ない画一的な、一律な、型にはめられた「真っすぐ」という一致を装った命の通わない無機質な不自然なものだからですね。

人は神の真似をして、あたかも素晴らしいモノづくりをしようとはしますが、そのすべてが真っすぐな直線か、真っすぐな曲線という画一的な **uniformity** であるがために、一致しているようで一致しておらず、バラバラです。

## Part Two

Uniformity とは、服を着せることです。

元々一つでないものに、同じユニフォーム、同じ服を着せて、あたかも一つであるかのように見せるのが、**uniformity** です。

**Unity** と違うのは、服を着せたことによって見た目は一緒にしたけれども中身が調和を成していない、循環が無い、呼吸が無い、血が通っていない、枠からはみ出ることを許さない、枠の中に納まっていることを最も大事にするというようなことです。

**Unity** は、見た目はデコボコでも、それが全て合わさり、麗しい調和、ハーモニー、統一性、一つであることが自然と表れます。

ですが **Uniformity** は、見た目は同じ服を着せていますから、均一で、一様で、画一的ですが、有機的な循環の伴う相関性、相互関係がありません。

見た目ばかりで、中身に息の通ったまとまりがありません。  
機械的な統制ですね。

神の造られた元々永続性を持つ **unity** を人間の手によって作り変えて、**uniformity** にしてしまい、物事すべてを機械化して、画一的に、形の同じ物品を大量に作ることによって経済や産業を成り立たせてきたこの世界に生きる私たちは、ともすると、似てはいるけれども同じところが全くない、多様で、色取り取りで、千々に美しい一人一人の人間にさえも、「こうあるべきだ」という画一性と均一性、単調さを求めてしまう傾向があります。

私たちが施し、施されている所謂「教育」という言われる行為でさえも、産業革命以降、どれだけ大量に、どれだけ効率よく、どれだけ同じ形のものを作り出し、売りさばき、利益を上げることが出来る人間を選別し、養育し、教え込み、そこに価値を見出させようとする啓蒙行為のようであるにもかかわらず、そのことにはほぼ気付かずに、「教育」という名のもと画一性と均一性と単調さを植え付け、植え付けられてきたという一面があります。

その「教育」と称するものがどこに行き着くのかと言いますと、良い学校に行き、良い職場に就き、良い職を手にし、人間が一律に作りだしたありとあらゆる良いものと称する画一的な型にはまった **uniformity** されたものに、どれだけたくさん囲まれ獲得しながら暮らすのかが、人生の成功を決定するという価値観に行き着きます。

もちろん、そのすべてが悪いということではありません。  
良い点も多々あることでしょう。

ですがこの世界、人間が服を着せて作った価値観やものに染まるのが、知らず知らずのうちにすべての人の人生の目標になってしまっているという画一的で単調な世界になっているというのは否めない事実でしょう。

「こうあるべきだ」という枠の中で、循環のない、生命力のない、一致を装った機械的な **uniformity** に染まった世界ですね。

そんな世界に生きる私たちに、「キリストにある一致」、「キリストにある一つ」を語ると、まかり間違うと、「カッチカチの大きな塊の一部になることだ」と、キリストにある多様性でさえも、また新たな「こうあるべきだ」を作ってしまう、その枠の中に収めようとするきらいが、どうしたって私たちの内にはあるので、そうならないようにと、「しかし、私たちは一人ひとり、キリストの賜物の量りにしたがって恵みを与えられました」と、パウロは語るわけです。

聖書の教える本質的な「らしさ」ではなく、「クリスチャンはこうあるべきだ」、「クリスチャンとはこういう人であるはずだ」、「クリスチャンらしく、牧師らしく、信仰者らしく、キリストの体らしくあるべきだ」と、自分たち本位の価値観に沿ったうわべや条件的なまた新たな「あるべきだ」という枠を作り出して、無用な比較と競争と軽蔑し合いをしないようにと、新たな **uniformity** をしないようにと、一致を装った裁き合いをしないようにと、キリストのからだとされた者たち一人ひとりの豊かな多様性を説くわけです。

何一つ綺麗な直線もなければ、滑らかな曲線もなく、出っ張ったり、引っ込んだり、長かったり、短かったり、デコボコであって初めて **unity** だということを説くわけです。

デコボコであることを比較して、優位に立ったり、劣勢に思ったり、強いことを誇ったり、弱いことを蔑んだりして、「キリストの量りにしたがって、同じように恵みを与えられている一人一人であることを忘れちゃならないよ」と説くわけです。

私たちは確かにキリストにあって一つです。

私たちは私たちの贖い・神の救いにおいて、また神の子であるということにおいて一つです。

先週もお話ししましたように私たちは、キリストをかしらとするキリストのからだの各部位としてすべてが一つです。

(ほっぺを叩きながら) ペチッと叩いたこの手が痛く、このほっぺが痛いのではなく、私という人が痛いという根本的に一つだということです。

でもそれと同時に、今パウロが語っていることは、「それでも手は手として、ほっぺはほっぺとして痛いという各部位としての違いがあるんだ」という当たり前のことを尊重出来るのが、キリストにあっての一つだと説くのです。

「違いがあっていいんだ」と、そして、「その違いこそが尊く、恵みであり、神の栄光のあらわれであり、私たちを相互に成長させる要因であることを覚えましょう」と説くのです。

### Part Three

マタイの福音書1章に行ってみましょう。

#### マタイの福音書1：1－6（パウロ）

イエス・キリストの系図です。

普通、一家の家系図と言いますと、後代に残し語り継ぐわけですから、その一家にとって汚名となるような内容はあまり入れようとはしないでしょう。

でも、このイエス様の系図は、汚点だらけです。

出来ればそんなこと隠しておきたいことが、たくさん記されております。

例えば、3節の

### ユダがタマルによってペレツとゼラフを生み (パワポ)

とありますが、タマルはユダの妻ではなく、嫁です。

実の息子の嫁でした。

嫁との間に、二人の子供を作ってしまったのが、キリストの肉の祖先ユダでありました。

5節の

### サルマがラハブによってボアズを生み (パワポ)

というのも、普通は出来れば隠しておきたい内容だと思います。

ここに出て来るラハブは娼婦でありました。

キリストの肉の祖先には、娼婦もいました。

6節の

### ダビデがウリヤの妻によってソロモンを生み (パワポ)

というのも、人としてあってはいけない不義理ですね。

ダビデは、忠誠心豊かな部下ウリヤを殺し、その妻との間に出来たのがソロモンでした。

キリストは、姦淫の罪を犯した男女からお生まれになりました。

このイエス・キリストの系図の書き方は、普通では有り得ない書き方ですね。

「うちのお爺ちゃんね、嫁との間に子供を作っちゃったんだよね」とか、「僕のお婆ちゃんね、娼婦だったんだよ」とか、「私のお爺ちゃん、部下を殺して、その部下の妻を妻に迎えて、子供を作っちゃったんだよね。で、その子が僕」なんてことは、まあ普通はそんな簡単に言わないですよ。

でも、言うんです。書くんです。

なぜか？

「初めからキリストの救いに与ることの出来ない人なんかいないんだ」と、私たちの考える「こうあるべきだ」という画一性、一律性、uniformity を打ち砕

くためですね。

キリストをかしらとする一致・一つは、私たちの想像も、予想も、「こうあって欲しい」という期待も、倫理道徳的概念も、正義感も、価値観も、常識も超えた一致、一つ、unityだということを私たちにお示しになるためですね。

では、何のために？

へりくだらせるため、謙遜にするため、誇ることも、赦しを学ばせ、愛することの深みと実りを経験させるためですね。

そして、もう一つ大切なこと、それは、互いが息が詰まるような思いをさせないためです。

「クリスチャンってね、真面目で、誠実で、正直で、片手に聖書、片手に讃美歌、話すことと言ったら聖書の話ばかり、聖い話ばかりで、なんか人間臭くないし、うそ臭いんだよね」という息詰まるような誤解を抱かせず、「すべての人が、どんな人でも、神の子となれるんだ」という宣言をこの世界の人々になさるために、父なる神さまは、イエス・キリストというお方をあり得ないぐらい汚点だらけの歴史的系図をもって、この世に誕生させてくださいました。

私たちの人生には色々あります。

私が最近見たドラマで、「ムービング」というとても面白い韓国のSFアクションドラマがあるのですが、その中に出て来る台詞が印象深く残りました。

お互い、人様に胸を張れるような人生を生きることが出来なかった二人の男女が、互いの人生の汚点について告白し合う場面で、先ず女性の方が自分の人様には決して話すことの出来ない過去について男性に告白します。

すると、それを聞いた男性は、女性に「이유가 있었겠지. 訳があったんでしょ」と、ボソッと優しくそっと寄り添うかのように答えます。

そして場面が変わり、その女性はその男性の運転するバイクの後ろに乗っている時、今度は男性が女性に、人様には決して話せないような自分の過去の話をしました。

すると、その女性が男性に、「이유가 있었겠지. 訳があったんでしょ」と、同じようにボソッと優しくこれまた寄り添うかのように、またさらに、男性が先に「訳があったんでしょ」と自分に話してくれたことに感謝の思いを込めて答えるのです。

そして、二人は結婚します。

「訳があったんでしょ。」

互いにデコボコだけれども、そのデコボコには訳があり、そのデコボコゆえに一つとなれ、一致し、二人で一つだということを味わえる。

「訳があったんでしょ」という台詞に、何だかイエス・キリストに通ずるものを感じました。

そして、『「訳があったんでしょ」と返せるクリスチャンでありたい』と、『「訳があったんでしょ」と答えられるような人の痛みが分かる人でありたい』、『「訳

があったんでしょ』と言えるような教会でありたい」、「『訳があったんでしょ』と言えるそんなキリストにある多様性と一致のある教会でありたいなあ」とドラマを見ながら、しみじみと思わされました。

#### Part Four

イスラエル民族の祖先である12部族の族長たち12人兄弟を見ますと、「え、こんな人たちが神の民と言われるイスラエル民族の祖先たちなの?!」と思わずにはいられないような人ばかりですね。

人は殺すし、嘘はつくし、近親相姦はするし、人は騙すし、嫉妬心に駆られて兄弟を奴隷に売り飛ばすし、もうちょっと普通じゃないと言いましょか、「中々こんな家族見ないよな」というレベルの人たちで、生々しい程に人間臭い人たちでした。

でも神さまは、そういう人たちを選び出し用いて、一人ひとりに、神が相応しいとお思いになさる恵みを与えて下さいました。

そして遂には、12人の族長たちから「神がすべてをなさった」という告白が出るほどの遜りと成熟へと導いて行かれました。

私たちは皆、神のわざの中に置かれている一人ひとりであり、正にお互い様です。

#### エペソ人への手紙4：7（パウロ）

恵みを与えられるとは、「あわれみを受けるに値しないのにあわれみを受ける」ということです。

あわれみを受けるということは、誇れるものなんか何もないということです。誇れるものがないということは、比較や競争や軽蔑し合うことによって、自らの存在意義を示そうとすることの放棄を意味します。

キリストを見上げることによって、互いの違いを妬んだり羨んだりすることからの解放、脱却、自由を味合わせて頂くということです。

使徒パウロが言おうとしている「一致、一つ」とは、互いに区別のつかないかっかっちの大きな塊の一部になるということではなく、私たち自身の立ち位置を喪失することでもありません。

私たちは変わらず一個人でありながらも、一つという有機的な、生命力溢れる柔軟な活気のある一つであれるということです。

息詰まるような見てくれだけの一致を装うのでもなく、いつも真っすぐ、いつもきちんと、いつも正しいことばかり、いつもデコボコのない綺麗な直線と滑らかな曲線で、見た目は一見すると整っているようで、整理整頓されているようだけれども、その内実は濁っていて、裁き合いがあって、循環もなく、枠の中に



無理に押し込めて、整った形を装った機械的な統制ではないのが、「一人ひとり、キリストの賜物の量りにしたがって恵みを与えられた、平和の絆で結ばれた、御霊による一致」です。

以前青年主事であった時、青年たちや中高生たちと一緒に、千葉の hi-b. a. キャンプ場にゴールデンウィークキャンプ・L3 キャンプに行ったことがあるのですが、その時は清野先生、保浦先生、井上先生、私という男性牧会スタッフ全員がキャンプに参加しました。

そのキャンプでの私の役割は、とにかくキャンプを盛り上げることだと思ひまして、率先して、どの青年たちよりもどの中高生たちよりも、ふざけた子どものようにふざけたのですが、そのキャンプから帰ってきてからしばらくして、保浦先生から呼ばれました。

「何か悪いことしたかなあ。怒られるのかなあ」とちょっとビビりながら保浦先生の部屋に行きましたら、保浦先生が開口一番、「洪先生良かったよ。洪先生がキャンプの中で一番バカになってて良かったよ。」

大人もそうだけど、特に中高生や青年たちには、バカになれる存在がそこにいることは大事なことなんだよね。

牧会者がバカになれたら、みんなバカになれるから良いんだよね」と仰って下さり、それから、「ああ、僕はこれから率先して、安心してバカになれる牧師になろう」と思えるようになりました。

で、こんな感じの牧師になりました。

今でも、ふざけた真面目な牧師、真面目だけれどもふざけた牧師でありたいと願っております。

なぜならば、デコボコだからです。

デコボコなのが、恵みだからです。

デコボコなのが人間であり、そんな私たち一人ひとりをご自分の体として下さっているのが、キリストだからです。

デコボコなのがキリストにある unity であり、命の通う自然な形だからです。

## Conclusion

誰も、他の人と比べて優れてはいません。

誰かが、誰かよりも勝っているということもありません。

それゆえに、私たちすべての人は、一切合切根こそぎごっそり全面的に、イエス・キリストに依存し、この方のみを信頼するようになっており、私たちの誰もが、誰かにとって罪人ではありません。

つまり、誰も裁く側にはなれないということです。

イエス・キリストのみが私たちに必要なお方であり、イエス・キリストのみが私たちの裁き主であられ、イエス・キリストのみが証人であられます。

このことを私たち一人一人が認めることが、今日の御言葉エペソ人への手紙 4：7が言わんとしていることです。

私たちはともすると、自分自身のことを信用に信頼に値するものだと錯覚してしまいますが、私たちはデコボコで、私たちの度量ではどうすることも出来ないそのデコボコを恵みに変えて下さり、互いが互いを喜び合い、互いになければならない存在同士であるという血の通う命ある者として下さったのがイエス・キリストであり、イエス・キリストにあって、一人ひとりである一つです。

教会は、デコボコという多様性をキリストにあって一つとされ、神さまの満ちあふれる豊かさが、その栄光の中で体現されることを期待されているところです。

そんな恵みに入れられていることに感謝し、神さまの全ての満たしと豊かなご栄光とが、キリストのからだである私たち一人一人の神の子によって成っているこの教会にあらわされることを信じたいと思います。

お祈りいたします。

祝祷：エペソ 4：7